

## ムラサキサギゴケの和名の変遷

横川昌史

ムラサキサギゴケ (図1: 16ページ) はサギゴケ科の多年草で、田んぼの畦などに生えます (遠藤 2017)。人里近くではおなじみの植物なので見たことある人も多いのではないのでしょうか。ムラサキサギゴケにはときどき白花を付けるものがあり (図2: 16ページ)、サギシバやシロバナサギゴケなどと呼ばれ区別されることがあります。このムラサキサギゴケについて「ムラサキサギゴケのことを最近サギゴケと呼ぶようになったのですか？」という質問を2018年の春に受けました。2017年に日本の野生植物という著名な図鑑の第5巻が改訂され、その図鑑にはムラサキサギゴケのことがサギゴケとして掲載されているため、質問した方は最近サギゴケと呼ぶようになったという認識をされたのだと思います。実際、ムラサキサギゴケの和名については図鑑によって記述が異なるのですが、その歴史と変遷について少し調べてみたので報告します。

明治以降の日本の植物に関する目録や図鑑、ムラサキサギゴケの学名を検討した論文を手あたり次第調べて、ムラサキサギゴケにあたる植物がどのような和名で呼ばれているか調べました (表1)。その変遷を見てみましょう。明治時代に登場した日本の植物について網羅的に記載された文献では主にサギゴケと呼ばれており、白花品については記述がないか、具体的な呼び名はつけられていません (松村 1884; 松村 1895; 斎田 1897)。その後、1897年に牧野富太郎がサギゴケの和名について具体的な整理を行っています (牧野 1897)。この文献の中で牧野は、江戸時代に出版された本草綱目啓蒙を引用し、いわゆるムラサキサギゴケの和名について『(和名) さぎごけ、さぎそう、はげな、あげな等』と記述しています。また、この文献の中で白花品に名前を付けサギシバと呼んでいます。その後、1940年ごろまで、併記される和名や別名はあるものの紫花品の呼び方はサギゴケが主流です。一方、白花品についてはサギシバのほかにシロバナサギゴケと呼ばれることもあり、多少の混乱が見られます。

1940年に出版された牧野日本植物図鑑 (牧野 1940) でムラサキサギゴケという呼び方が登場しま

す。この図鑑では『むらさきさぎごけ 誤称 さぎごけ』とされ、サギゴケという名称は誤りだと明記されています。その理由として牧野は『さぎごけノ和名ハ鷺苔ノ意ニシテ元来ハ白花品ヲ指スベキモノナリ、即チさぎしばト同名ナリ、故ニ今其称ヲ改訂ス。』としています。確かに花の色と形を白い鷺の姿に例えたのであれば、紫花をサギゴケと呼ぶのには違和感があります。一方、この文献では白花に対してはサギゴケの和名は使わず、『一変種ニ白花品アリ、さぎしばト云フ。』として、白花品をサギシバと呼んでいます。

その後、牧野富太郎の主張を踏襲したのか、多くの図鑑や文献で、紫花品にはムラサキサギゴケの名称が、白花品にはサギシバの名称が使われることが多くなります。ただし、1981年に出た日本の野生植物 草本Ⅲ (山崎 1981) では、この植物について単にサギゴケと呼び、「白花品をサギゴケまたはサギシバと呼び、紅紫色のものをムラサキサギゴケと呼んで区別することがある」としています。この図鑑の本文ではこの植物の花色は紅紫色としていることから、紫花品についてはサギゴケと呼ぶのが基本だということが明確に示されています。この日本の野生植物という図鑑は、日本国内の植物が網羅的に掲載されており、植物の研究や勉強をしている多くの人が参照する、言わば標準的な図鑑です。そのような図鑑でサギゴケという名前が使われたことの影響は大きいのか、その後の文献では、日本の野生植物と同じような記述をする図鑑が出てきます。一方で、牧野富太郎と同様に紫花品をムラサキサギゴケと呼び、白花品と明確に呼びわける図鑑も出版されています。ただし、白花品の呼び方はまちまちで、むしろサギシバよりもサギゴケが主流になっているようです。

ここまでいわゆるムラサキサギゴケの呼び方の変遷を見てきましたが、ここで「ムラサキサギゴケのことを最近サギゴケと呼ぶようになったのですか？」という質問に対する答えを用意してみましょう。いわゆるムラサキサギゴケの呼び方について、サギゴケという名称はむしろムラサキサギゴケよりも古い

表1：明治以降の植物目録や図鑑に出てくるムラサキサギゴケの花色別の呼び方の変遷。別名表記やかっこ書きなどによって主となる呼び方と別名を明らかに分けている名称には（ ）を付した。

著者・出版年	文献	紫花の呼び方	白花の呼び方
松村(1884)	日本植物名彙	ハゼ、サギゴケ	(注1)
松村(1895)	植物名彙	サギゴケ	(注1)
斎田(1897)	大日本普通植物誌	サギゴケ	(注2)
牧野(1897)	植物学雑誌 11	サギゴケ、サギソウ、ハゼナ、アゼナ等	サギシバ
Makino(1902)	植物学雑誌 16	サギゴケ、ハゼナ	サギシバ
斎田・佐藤(1907)	内外実用植物図説	サギゴケ	(注2)
阪庭・萱場(1908)	新編植物図説	サギゴケ	(注2)
東京博物学研究会(1908)	植物図鑑	サギゴケ	(注2)
松村(1912)	帝国植物名鑑	サギゴケ、ハゼバナ	サギシバ
東博研(1924)	図解植物名鑑	サギゴケ	シロバナサギゴケ
村越(1925)	大植物図鑑	サギゴケ	シロバナサギゴケ
牧野・田中(1928)	科属検索 日本植物志	サギゴケ、(ハゼナ)	サギシバ
牧野・根本(1931)	訂正増補 日本植物総覧	サギゴケ、ハゼナ、ハゼバナ	サギシバ、サギスゲ、シロバナサギゴケ
Nakai(1934)	植物研究雑誌 48	サギゴケ	サギシバ
村越(1936)	総合新植物図説	サギゴケ、(ハゼナ、ハゼバナ)	サギシバ、(シロバナサギゴケ、サギスゲ)
根本(1936)	日本植物総覧 補遺	サギゴケ、ハゼナ、ハゼバナ	サギシバ、サギスゲ、シロバナサギゴケ
牧野(1940)	牧野日本植物図鑑	ムラサキサギゴケ	サギシバ
原寛(1949)	日本種子植物集覧 第1冊	サギゴケ、ムラサキサギゴケ	サギシバ、シロバナサギゴケ
大井(1953)	日本植物誌	ムラサキサギゴケ	シロバナサギゴケ、サギゴケ、サギシバ
北村ほか(1957)	原色日本植物図鑑・草本編 I	ムラサキサギゴケ	サギシバ
牧野(1961)	牧野新日本植物図鑑	サギゴケ、(ムラサキサギゴケ) 注3	サギシバ
沼田・吉沢(1968)	日本原色雑草図鑑	ムラサキサギゴケ、(サギゴケ)	サギシバ
宮脇(1978)	日本植生便覧	ムラサキサギゴケ	シロバナサギゴケ、(サギシバ、サギゴケ)
山崎(1981)	日本の野生植物 草本Ⅲ	サギゴケ	(注4)
矢野ほか(1983)	日本の植生図鑑Ⅱ 人里・草原	サギゴケ	(注1)
杉本(1983)	日本草本植物総検索誌 I	ムラサキサギゴケ	サギゴケ、(サギシバ)
長田(1984)	検索入門野草図鑑5すみのれの巻	ムラサキサギゴケ	サギゴケ
塚本・藤岡(1988)	園芸植物大事典	ムラサキサギゴケ	シロバナサギゴケ、(サギゴケ、サギシバ)
林(1989)	野に咲く花	ムラサキサギゴケ	サギゴケ
米倉(2012)	日本維管束植物目録	サギゴケ、(ムラサキサギゴケ、ヤマサギゴケ)	シロバナサギゴケ、(サギシバ)
林・門田(2013)	野に咲く花 増補改訂新版	サギゴケ、(ムラサキサギゴケ)	(注5)
浅井(2015)	植調雑草大鑑	サギゴケ、(ムラサキサギゴケ)	(注6)
遠藤(2017)	改訂新版日本の野生植物 5	サギゴケ	(注7)
神奈川県植物誌調査会(2018)	神奈川県植物誌2018	ムラサキサギゴケ	サギゴケ、(サギシバ)

注1：花色の言及なし。

注2：紫色と白色があるとしているが、呼び分けていない。

注3：「紫花の普通品はムラサキサギゴケと呼ぶべき」としている。

注4：「白花品をサギゴケまたはサギシバと呼び、紅紫色のものをムラサキサギゴケと呼んで区別することがある」としている。

注5：「白花をサギゴケ、淡紫色の花をムラサキサギゴケとして区別する考えもある」としている。

注6：「花冠が白色のタイプもまれにある」としている。

注7：白花品をシロバナサギゴケまたはサギシバとよび、紅紫色のものをサギゴケまたはムラサキサギゴケと呼んで区別することがある」としている。

ものなので、「最近サギゴケと呼ぶようになった」というのは誤りです。サギゴケという呼び名は本来、白花品に使われるべきものなので、1940年に牧野富太郎によって、紫花品にはムラサキサギゴケという名称が付けられました。和名については、何を使うかは任意なので、その後の図鑑では紫花品をムラサキサギゴケと呼ぶ場合とサギゴケと呼ぶ場合があります。このような内容のメールを質問者に返しました。

さて、ムラサキサギゴケに関するたくさんの文献を調べましたが、その和名について根拠を検討した文献は少なく、牧野(1897)と牧野(1940)の2つだけです。牧野(1897)では江戸時代の本草学者である小野蘭山が1803-1805年に刊行した本草綱目啓蒙を引用しています。本草綱目啓蒙には植物の呼び名と形態について詳しい記述があります。ムラサキサギゴケと思われる植物について、16の呼び名が記されており、呼び名によってはどの地域で呼ばれていたかまで書かれています(図3A)。これらの中から牧野が『さぎごけ、さぎそう、はげな、あげな等』と4つの呼び名を選んだ理由はわかりませんが、「サギゴケ」と「サギソウ」は京の、「はげな」は泉州(現在の大阪府南西部)の地方名のように。「アゼナ」については呼ばれていた地域名が記されていません。本草綱目啓蒙では「(花は)淡紫色、或ハ淡紫碧色」とされているため、これらの呼び名

の植物は紫花品を指していると思われます。一方で、『白花ノ者ハ…(中略)…勢州(現在の三重県中部)ニテ、サギシバト呼ブ』と書かれており、白花品の存在も明記されています。牧野(1897)ではこれらの記述を踏襲したようです。

一方、牧野(1940)では『さぎごけノ和名ハ鷲苔ノ意ニシテ元来ハ白花品ヲ指スベキモノナリ』と書かれていますが、この根拠は何なのでしょう。牧野(1940)では文献の引用をしていますが、1773年に伊藤伊兵衛によって書かれた地錦抄附録に「さぎごけ」が登場します(図3B)。「さぎごけ」の説明は『花形鳥の飛ぶ形にして色雪白花は地に敷て青くこけのごとく…』となっており、白花のものを「さぎごけ」と呼んでいることがわかります。おそらく牧野はこの記述を根拠に、サギゴケは元来白花品を指すと考えたのではないのでしょうか。

以上、江戸時代の文献まで見てみるとムラサキサギゴケの和名の由来についてある程度のことになってきました。現在の図鑑でもムラサキサギゴケの呼び方は様々ですが、サギゴケは鷲苔のことで本来は白花品のことを指すという牧野富太郎の主張は尤もだと思います。そのため、私自身は紫花品をムラサキサギゴケ、白花品をサギゴケと呼ぶのが良いのではないかと考えています。一方、最近の主要な図鑑や和名のチェックリストを見ていると、紫花品をサギゴケとし、白花品をシロバナサギゴケとしている

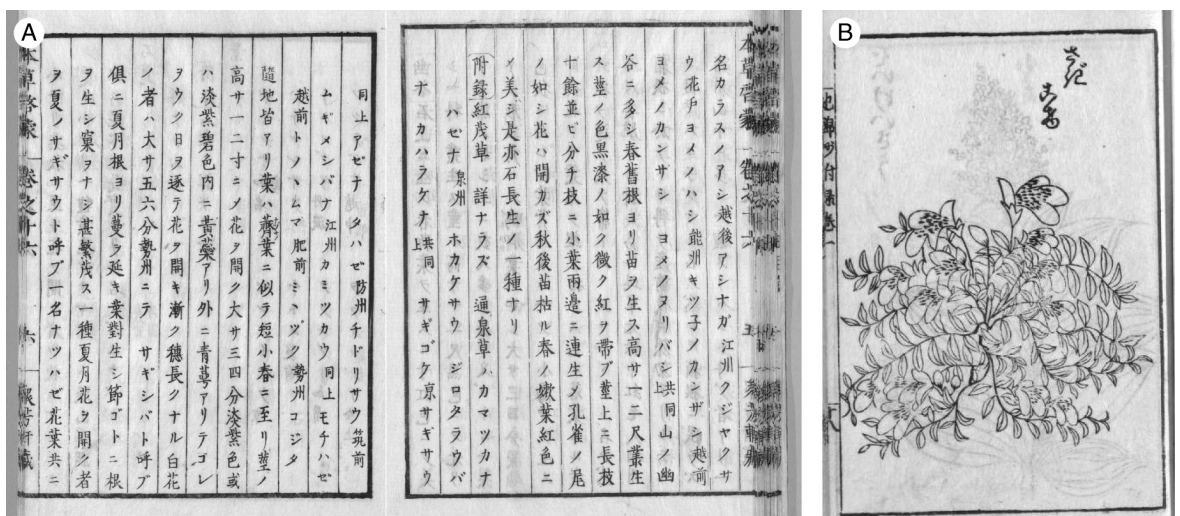


図3：ムラサキサギゴケに関する江戸時代の文献。A：本草綱目啓蒙 卷之十六 草之九 石草類の石長生の附録の「サギゴケ」に関する記述。様々な「サギゴケ」の呼び名が書かれた後に形態の詳細な記述があり、ムラサキサギゴケとよく一致する。白花をサギシバと呼ぶという記述も見られる。B：地錦抄附録の「さぎごけ」の図。上部の崩し字は「さぎごけ」と読める。いずれの資料も国立国会図書館デジタルコレクションより引用し、掲載用にトリミングしている。

ことが多く、図鑑などの記述はこちらの呼び分けに収束していくのかもしれませんが。

ある植物の呼び方について、どの和名を採用するかには明確なルールがありませんが、多くの植物の和名は比較的安定しており、「標準的な和名」が概ね定まっています。一方で、文献によって和名が異なる植物も存在し、ムラサキサギゴケについては、「標準的な和名」が1つに定まっていない例と言えるでしょう。多くの図鑑や目録ではある和名を採用した根拠が示されることはまずありませんが、今回のように様々な文献を参照して、ある植物の和名の由来や変遷を調べることで、いろいろ面白いことがわかってきます。このように名前の由来について検討することも植物を楽しむ一つの方法を言えるでしょう。図鑑などを見比べて和名の違いを見つけた際は、図書館などに足を運んでぜひ詳細な検討をしてみてください。

今回の文献調査では国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/>) を活用しました。古い文献であれば、このページで閲覧できますので、興味のある方は見てみてください。

#### 引用文献 (出版年順)

- 松村仁三 (1884) 日本植物名彙. 丸善, 東京.
- 松村仁三 (1895) 植物名彙. 丸善, 東京.
- 斎田功太郎 (1897) 日本普通植物誌. 大日本図書, 東京.
- 牧野富太郎 (1897) うりくさ、あぜな、なつはぜ、ときはぜ及びピサギゴケ等ノ名實考. 植物学雑誌11: 389-392.
- Makino T. (1902) Observations on the Flora of Japan. (Continued from p. 152.). 植物学雑誌 16: 153-162.
- 斎田功太郎・佐藤礼介 (1907) 内外実用植物図説. 大日本図書, 東京.
- 阪庭清一郎・萱場柔寿郎 (1908) 編植物図説. 松栄堂, 東京.
- 東京博物学研究会 編 (1908) 植物図鑑. 北隆館ほか, 東京.
- 松村仁三 (1912) 帝国植物名鑑 下巻後編.
- 東京博物学研究会 編 (1924) 図解植物名鑑. 二松堂書店, 東京.
- 村越三千男 (1925) 植物図鑑. 大植物図鑑刊行会, 東京.
- 牧野富太郎・田中貢一 共編 (1928) 科属検索日本植物志. 大日本出版, 東京.
- 牧野富太郎・根本莞爾 (1931) 訂正増補 日本植物総覧. 春陽堂, 東京.
- Nakai T (1934) Notula ad Plantas Japonia & Korea XLIV. 植物学雑誌 48: 773-792.
- 村越三千男 (1936) 総合新植物図説. 昭文社, 東京.
- 根本莞爾 (1936) 日本植物総覧補遺. 春陽堂書店, 東京.
- 牧野富太郎 (1940) 牧野日本植物図鑑. 北隆館, 東京.
- 原寛 (1949) 日本種子植物集覧. 岩波書店, 東京.
- 大井次三郎 (1953) 日本植物誌. 至文堂, 東京.
- 北村四郎・村田源・堀勝 (1957) 原色日本植物図鑑 草本編 第1 (合弁花類). 保育社, 大阪.
- 牧野富太郎 (1961) 牧野新日本植物図鑑. 北隆館, 東京.
- 沼田真・吉沢長人 (1968) 日本原色雑草図鑑. 全国農村教育協会, 東京.
- 宮脇昭ほか 編 (1978) 日本植生便覧. 至文堂, 東京.
- 佐竹義輔ほか (1981) 日本の野生植物 草本3 (合弁花類). 平凡社, 東京.
- 矢野悟道 (1983) 日本の植生図鑑2 人里・草原. 保育社, 大阪.
- 杉本順一 (1983) 日本草本植物総検索誌. 井上書店, 東京.
- 長田武正 (1984) 検索入門野草図鑑5 (すみれの巻). 保育社, 大阪.
- 塚本洋太郎・藤岡作太郎 (1988) サギゴケ属 (塚本洋太郎総監修) 園芸植物大事典2. P326-327. 小学館, 東京.
- 林弥栄 監修 (1989) 野に咲く花. 山と溪谷社, 東京.
- 米倉浩司 (2012) 日本維管束植物目録. 北隆館, 東京.
- 林弥栄・門田裕一 監修 (2013) 野に咲く花: 写真検索増補改訂新版. 山と溪谷社, 東京.
- 浅井元朗 (2015) 植調雑草大鑑. 全国農村教育協会, 東京.
- 遠藤泰彦 (2017) サギゴケ科 (大橋広好ほか編) 改訂新版 日本の野生植物5. p144-145. 平凡社, 東京.
- 神奈川県植物誌調査会 (2018) 神奈川県植物誌. 神奈川県植物誌調査会, 神奈川.

**参考文献:** 江戸時代の文献の記述については、以下の著書を参考にした。

京都園芸倶楽部 編集 (1983) 地錦抄附録. 八坂書房, 東京.

小野蘭山 (1991) 本草綱目啓蒙2. 平凡社, 東京.

<よこがわ まさし: 博物館学芸員>